

---

# 蜘蛛の巣の蝶々

北城 十

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

蜘蛛の巣の蝶々

### 【Nコード】

N8914D

### 【作者名】

北城 十

### 【あらすじ】

害性生物処理を行う公務員・城田が処理対象引取りの際に少年・江口と出会った事から始まる、婚約者・美里を巻き込んだ変動の話。

## 1 (前書き)

この小説は春エロス2008という企画のために書かれたものであり、内容に性描写が含まれます。くわえて、中学生の性行為や同性での性行為、残酷と取れる表現も含まれますのでご注意ください。

ダン、ダン、ダン。

規則的に手を動かす。その音に合わせてごろごろと物の転がる音が響く。それほど大きくない簡素な部屋で、じっとその顔を見つめながらベルトコンベヤーを流れてくる物言わぬ生き物の首を刈っていく。首を失った体は空しくベルトコンベヤーの上を滑ってミンチ機に落ちていった。毎日繰り返す作業。何の感慨もなく、きちんと顔の確認をしなければいけないのもうそれも杜撰だ。

城田貴紀は害性生物処理を行う公務員だ。職業名はそのまま害性生物処理官。刈った首を冷凍室の棚に大量に長期陳列・保管していることから『首屋』とも呼ばれている。仕事内容は主に今と同じように『害性生物』と認定された迷惑な生き物の処分を執行することである。ほとんど毎日特殊な薬で動きも感覚もなくした飼い犬から人間まであらゆる生物の首をはね、殺していた。勤め始めて三年のベテランとも新人ともつかない微妙な時期だ。

ベルトコンベヤーの上から生き物が消えた。どうやら今日の割当て分は終わったようだ。顔を上げると並ぶ他の二つのベルトコンベヤーではまだ作業が続けられていた。次から次へと対象が運ばれてくる。ベルトコンベヤーの速度は変わらないので、これ程までに終了時間に差が出ることは少ない。城田は不思議に思いながら首の詰まったプラスチックの箱を台車に乗せて冷凍室に運ぶ。

冷凍室へのドアは、U字になったベルトコンベヤーが伸びるのに向かいの壁の、それも城田のラインとは一番離れた端にある。対象的に城田のラインの前には冷凍室に続くドアと変わらない更衣室へ出るためのドアがあった。滑りの悪い台車が耳につく騒音を出すのを気にしながら、同僚のラインの横を通りドアを抜ける。中のごつい金属のドアも開けると体を冷気が包んだ。身震いする。城田は暑いよりは寒い方が得意であるが、それとこれとは話が違った。急

激な温度の変化で眼鏡が曇る。城田はレンズを拭うといそいそと生首を陳列し、来たのとは別の二重扉をくぐって外にでた。

そこは、城田のラインの傍にあるドアの外と同じ更衣室だ。城田は自分のロッカーの傍に行くと、手早く嚴重な作業衣を脱ぎにかかった。目以外の場所を全て覆う完全防備だ。

「おお城田、終わったな」

恰幅がよく頭の心許ない男が豪快な笑みを浮かべて近寄ってきた。この処理所の所長である岸だ。あまり城田と相性がいいとは言い難かったが、嫌みのないよい上司だった。城田が手を止めて無言で見つめると、岸は首の後ろをぼりぼり搔いて言葉を続けた。

「さつき田上から電話があつてな、自転車との衝突事故で骨が欠けて病院にいるらしいんだ。それなのに間の悪い話で今日田上には処理対象の引取りの仕事が入っていてな」

「俺が引き取ってくればいいんですね」

「そうだ。お前は田上と仲もよかつたし対象の扱いも上手いから、勝手に割当てを変えた。まあ、これは田上に引取りの仕事を押し付けてお前があまりやらないのがいけない」

勝手とは言い切れない言葉を残し、詳しい資料を置いて岸は出ていった。別に城田が引取りの仕事が嫌いで田上に押し付けているわけじゃない。引取りの仕事があまり好きではないのは確かだが、問題は田上にあるのだから。

田上は城田より一年早く入所した先輩だったが、波長が合うらしく入所してすぐ遠慮ない関係の数少ない友人の一人となった。田上は不健康そうではあるが煩くない華やかさを持った男で、城田は自分の凡庸さと比べいつも感嘆した。繊細で理解しがたい部分もあるが、田上は一緒にいて気の休まる特異なモノを持っていた。しかし

田上は繊細すぎて、何か思いつめたようになってしまっている。仕事について悩みがあるらしい。それも処理のことだ。

彼は処理が嫌で嫌でたまらないのだと言う。城田が不思議そうな顔をしていると、悲しげな顔で君にも分からないか、と呟いた。そんな田上をほっておけなくて、城田は考えなしにできるかぎり自分が代わると言っていた。それから、田上が滅法嫌う人の処理を優先して引取りの仕事と交換するようになった。ようするに押し付けられたのは田上ではなく寧ろ城田だ。

田上の仕事を肩代わりすることぐらい何とも思わないのに、自分が断りたいのだろうと思っっているような岸の発言に少し腹が立った。友人が怪我をした時の手伝いなど、それこそ自分から志願してでもやるというのに。城田は岸の消えた方に溜め息を吐いてから資料に目を移した。

今回の引取りの対象はどうやら人間の、学生らしい。城田は大体に目を通すと、それほど遠くない中学校の名前を頭に刻んで着替えを済ませ、すぐに車に乗り込みそこに向かった。

城田は敷地内の駐車場に車を留め、校舎を見上げた。典型的な中学校舎より少し華美で装飾的な建物。築年数はかなりのようだが、コンクリートの黒ずみは汚いというより何やら荘厳な様子に思えた。平日の昼間である今は、授業の最中らしくしんと静まり返っている。

ここは高等中学校と呼ばれる所だからだろうか、と校舎の趣の理由について考察した。現在、義務教育は小学六年に中学四年の合計十年面倒を見る。それが終わると学びは多様化する。学力低下を嘆く政府が企業に教育機関を設け、そこに任せる形で働きたければ勉強しなくてはならない制度に変えたからだ。悪い成績をとれば解雇される。その恐怖から学生は自らの意志で学ぶのだという。だが自営業などでは職業学校を作ってはいられない。え医師学校に入るには学力が必要で、中学で教育機関とはおさらばしようと考えてる人や志の高い人のために普通の中学より少しレベルの高い教育機関として高等中学校が創られた。中学と同じく義務教育後半四年に換算される。普通の中学を卒業した城田のような人間は、本当には高等中学の実態を知りえずに終わるので高等中学に対し夢見がちだった。だがあながち夢でもないかもしれない、と校舎に入ってから思った。ただ“ここ”が、なのかもしれないが、そこは何か、低俗で幼稚な空気を排除されたような空間で、海外にでも来たような異質な風が吹いていた。城田は来客用玄関の受付で応接室の場所を教えてもらうと、落ち着かない気持ちで緑がかつたりノリウムの廊下を足早に進んだ。

応接室なのだからわかりやすく玄関から近い所であればよいものを、応接室は玄関の対角線上の深い部分にあるらしい。進んでいると中庭に面した回廊に出た。アーチ状の天井だとか石の手摺りだとか一々凝っていてまた居辛くなった。

この突き当たりが応接室だ、と分かった時、いきなり右手の教室

からがたりと物音がした。外廊下に面しているために風に晒され揺れるプレートには『進路指導室』と書かれており、人が密集している時のざわめきはない。知らずと耳を澄ませていた城田は、その中に熱い呼吸の繰り返しを聞いて動けなくなった。子どものような好奇心で城田は耳をそばだて、そこに背徳的な少年の声を聞くと今度は扉の窓から中を覗き見ていた。

窓のない薄暗い空間の中、二人の人影は本棚にもたれて熱心にキスを繰り返している。濡れた音と頭の角度でそれが深いキスであると分かる。本棚に背を預けているのは詰め襟の少年で、もう一人は濃いグレイのスーツを着た大人の男だ。顔はよく見えないが眼鏡をかけているようで、その眼鏡とスーツに自分を重ねてしまい、城田は赤面し鼓動が速まるのを感じた。

背丈の違いで覆いかぶさるようにキスしていた男が、少年の詰め襟の制服と中の真っ白なシャツをだけさせ、口付ける位置を下げながら膝を折っていく。キスをやめたことにより少年の顔が見えた。艶やかな黒髪は優等生然とした様子に整えられ、ひと昔前の学童を連想させた。だが顔がそれを裏切る。目元に紅を掃き潤んだ虹彩はゆらゆらとどこへとなく飛んで、反開きの唇は先ほどのキスで濡れた光を放ち朱く何かを誘っている。濃くはないが長い睫が痙攣するように小刻みに揺れた。

男が少年の淡い色の胸の粒を舐ぶると、少年は白い喉を晒して仰け反り、濡れた声を上げた。その声の甘い低さと掠れに城田の体温は上がった。城田はただ少年だけを注視し、その変化の一つひとつをゆっくりと味わう。男の頭が少年の股に到達すると、白く細い指がその頭を抱え少年は俯いた。いや、俯こうとして正面を向き、止まった。さっきまでゆらゆらと舞っていた視線が一点を向く。少年は城田を見ていた。揺らぐことのない目で、一心に。

城田はへたへたとその場に座り込んでいた。驚きとも恐怖とも快感ともつかぬ感覚が城田の膝を殺した。驚きや戸惑いのような表情を向けると思っていた。しかし少年は見物人の存在を知ってなお恍

惚とした表情を崩さず、笑ったのだ。蟲惑的な、色気のある笑みだった。これが中学生かと、中学生とはこんな生き物だったかと信じられない思いに思考は停止した。

がらりと目の前の引き戸を開く音で我に返った。教師らしきスーツで眼鏡の男がぎよっとした顔をしながら足早に出て行った。カツカツという怒ったような硬質な音が離れていく。『進路指導室』の中で少年は胸元を晒し、ズボンを緩く穿いた状態で横たわっていた。まだ荒い息に蒸気した頬。潤んだ瞳で見つめられた。

「見ていましたね」

「犯罪だ……」

「合意でも犯罪になるのは十三までだったと思いますけど」

「相手は教師だ」

「みんな黙認しています」

城田は疲れてがっくりとうなだれた。フツと少年が楽しそうに笑い、ゆっくりと這ってきた。少年は城田の顔を覗き込み、右手でそっと頬から耳の後ろへと撫でた。その指が髪に触れた時、少年の股間に顔を埋めていた男の頭を思い出した。この指がああ男の頭を、髪を、同じように撫でたのだと思ってびくりと体を震わす。また少年は笑った。

やんわりと少年は城田の頬を包み、城田の顔のいたる所に口付けた。遊ぶような息が触れる。

「止めてくれ。君はあの男とやったのにまだ足りないって言うのか」  
「違う。僕はいろいろな人にこの体を差し出してきたけど、貴方を見て初めて自分から欲しいと思った」

「俺の意志はどうなる」

「何言ってるんですか」

少年の手が城田の股を握りこむ。はつとして城田は一気に赤面した。

「だって貴方勃ってる」

にやりと笑った少年の顔を見て頭に血がのぼった。城田は勢いよく少年を突き放し立ち上がった。

「うるさい、勃ったからって同意したわけじゃない」

叫んだ声は笑えるほど上擦って惨めに響いた。それを聞いた少年は子どもをあやす母のような困った笑顔で城田を抱き、精一杯腕を伸ばしてその髪を撫でた。

少年は巧みに体重移動して城田を部屋の中に引きずりこみ、強引に机に追い詰めた。

「ごめんなさい、怒らないで。少し嬉しかったただけなんです」

哀れみを誘うような媚びるような声を出すとすぐに不意をついて城田の唇を舐めた。その間に指はかちやかちやと城田のベルトを外している。城田は完全に少年のペースに吞まれていた。城田は動揺しておろおろするばかりで、その場から逃げる事ができなかった。ついに少年の指がフアスナーを下ろし、昂ったものを下着から引きずり出した。少年の指に直に掴まれ、城田はうっと思を呑む。そのまま少年は目をきらきらさせながらしばらくそこを見つめていた。恥ずかしさに城田は泣きそうになりながら、こいつは害性生物だ、いつか必ず処分してやる、と心の中で悪態をついた。やっと動いたと思えば少年はそこを赤ん坊が乳を飲むように熱心に吸うだけで、じれったい快感に城田はあられもなく喘ぎ、泣きながら少年に許しを乞うていた。しかし今度は少年は笑わない。そのままずっと吸わ

れ続け、解放された時には足腰が立たずに座り込んでいた。

「よかった」

「よくない」

「イったのに」

「よくない」

「泣いてよがってたのに」

「苦しかった」

弱り切って眩くと少年が黙り込んだ。城田は泣きながらずっと左手薬指を摩っていた。そこには指輪がある。大切な指輪がある。

「結婚してるんですか」

「婚約してるんだ」

「ふうん」

少年は城田の下肢を綺麗に舐め清め、服を整えて渋い色のチエツクのハンカチで頬を流れる涙を拭った。少年は城田にそのハンカチを握らせ、自らも服を整えた。

「僕は江口泰雄です。今度会ったら呼んでください」

「もう会うか」

「会います」

少年は迷いなく言うと、また痺れるような蟲惑的な笑みを浮かべ城田の唇にキスをした。

「絶対にまた会いますよ」

最後のキスは自分の放った物の青臭い臭いがして、城田はまた泣

きたくなった。

眠ると江口の夢を見る。城田は婚約者である藤井美里と同棲していない。だから毎晩一人で惨めさに耐える。恋人とやって男としてのプライドを満足させることなど言語道断だと思う。女性に対して失礼だ。寄り掛かるのが嫌で美里とは会い難くなった。

「顔色悪いね」

田上が心配そうに城田の顔を覗き込む。きつと寝不足で隈ができていることだろう。そういう田上は田上で先日事故で腕の骨が欠け、腕を吊つての出勤だ。少し顔色も悪い。欠けただけだったために一日休んだだけですんだが、田上と衝突した自転車は轢き逃げしていったらしい。岸が酷く怒って城田に語った。田上は苦笑して伏し目がちになった。だが田上の顔色が悪いのはきつと轢き逃げされたからでも傷が痛むからでもない。引取りの仕事ができなくなったからだ。引取りができなければ自動的に毎日の仕事処理だけになる。休めばいいのと思いつながら城田は田上の着替えを手伝った。

「そう言う田上さんも顔色悪い」

「いつもの事だろ」

「なお悪い」

城田は心の中で何度も休めばいいのにと呟いた。田上の疲れた表情を見続けるより、元気な顔でたまにでいいから会ってほしかった。

「何か悩みでもあるの」

「夢見が悪いだけだよ」

「本当に」

真実だ。美里と会わないのは相手を不快にさせない配慮だし、江口とのことは過ぎたことだ。夢見が悪い、それだけ。

城田はさりげなく右手薬指を摩った。

「誰かに頼るのは悪いことじゃない」

「夢見が悪いだけで何を頼るっていうんだ」

「夢の内容を人に話すと客観視できるらしいよ」

ぎくりとして城田は固まった。それに気付いた田上は探るように城田の顔を注視した。城田は見つめる田上から顔を逸らす。

「くだらない内容だ」

「なら俺に聴かせてよ」

城田は左手をぎゅっと握りしめた。体中いたる所から嫌な汗が滲んだ。

「嫌だ」

「それが原因だね」

田上が無事だった右手で城田の額を鷲掴み、顔を上げさせた。田上は怒っている。城田はうろたえた。どんなに恥ずかしい内容でも話さなければならなかったのか。あんなにも繊細で温厚で、少し押し弱い田上が怒っている。

「それは絶対に悩み事だ。俺は何だって君に相談したのに、君はしてくれない。いつもあっけらかんとして」

「悩みなんてなかった」

「今まではね。でも今はあるだろ」

城田は田上の手から逃げて俯いた。沈黙の中、田上は優しく城田の左手を握った。意図的に薬指に触れている気がする。

「ごめん。僕が信用ないなら彼女でもいい。親でも、他の友達でも誰かに頼った方がいい。話すのが嫌なら口に出さなくてもいい。誰かに頼りなよ」

「田上さんは一番の親友だ。信用ないわけない。ただ簡単に話せることじゃない」

信用していないわけではないが、繊細な田上には話したくなかった。毎晩少年に責め立てられる夢を見て下肢を高ぶらせる自分の異常さを知られたくない。田上は城田の苦しみを理解しようとするだろうが、きつと異常さに嫌悪を覚えるだろう。

「おい、何もたまたしてるんだ」

岸だ。大柄な体を揺らしてどしどしと歩いてくる。立ちすくむ二人に呆れたように鼻を鳴らすと、岸は持っていたファイルで城田の胸を叩いた。

「早く支度しろ。ベルトコンベヤーが動かせないだろ」

「はい」

二人の声が重なる。岸が消えると目が合って、田上が苦笑した。

「俺も自分勝手だな。本当は城田が悩んで動揺してるのを見て少し嬉しかった。城田はやっぱり人間だなって思った」

「やっぱりって何」

「分からなくてもいいんだ」

田上は柔らかく笑い、作業室にすりと消えた。城田は何とも腑に落ちない気持ちで後を追った。それでも田上の言葉は真摯に響く。

美里から会いたいと連絡がきて、迷いながら城田は田上の言葉を思い出していた。田上は頼れと言った。口に出さなくてもいいからと。そのうちに、城田は会いたいと言う恋人の言葉を嫌でもないのに無視し続けるのは自分のエゴのように感じ始め、あまり気の利いたことはできないと断ったうえで夕方美里の家に行くことにした。美里はそんなこと気にするはずがないと笑った。

美里の家は少し広めの1DKだ。優しい風合いの当たり障りないインテリアが飾る。落ち着ける雰囲気ではあると思う。

「いらっしやい」

玄関に足を踏み入れると、美里が微笑んで出迎えた。その足の間から茶縞の猫がナアオと顔を出す。彼女の愛するチツチヨだ。部屋の奥から美味しそうな匂いが届き、自分のために食事を用意してくれたのかと思ったら心が温かくなった。

「ごめんなさい、時間がなから簡単なものと思ってカレーを作ってたんだけど、カレーって煮込むものよね。まだ出来てないの」「いいんだ、そんなに腹も空いてない」「そお」

促されるまま風呂に入った。疲れているだろうと聞かれ、もう沸かしてあるから、と乗せられた。

美里の部屋のバスルームは今どき一人暮らしでは珍しいユニットバ

スではないバスルームで、小さいながら脱衣所もついている。来るたびに高いのだろうなあと感じた。しかし衣食住以外にこだわる所のない美里にしてみれば問題ないのかもしれない。城田の職場にも近いから、結婚したらここに住むことになるのかもしれない。

風呂から上がってみると脱衣所の籠に美里の部屋に置かせてもらっている城田の下着とパジャマが入っていた。風呂に入ると言ったら泊まってくと思うのは当たり前だったろう。悪い予感がした。まだ心の整理がついてないのに。

「私もお風呂、入ってしまうから、テレビでも見て待ってて」

脱衣所から出ると美里がにこにここと笑いながら言っ、入れ違いに脱衣所に消えた。城田は途方に暮れながらダイニングの椅子に腰を下ろした。座り心地はそれほどよくない。溜め息を吐くとチツチヨが足に擦り寄って鳴いた。その姿が可愛くて、城田はチツチヨを抱き上げる。犬のようにべろべろと顔を舐めてきたりはしない。拘束されたことが不満なのか、チツチヨは城田の胸を叩いて暴れる。仕方ないな、と城田はチツチヨを膝の上に下ろした。チツチヨはおとなしく城田の膝で丸くなる。早くも眠りそうなその顔を見て、少し笑う。

「テレビ、見てなかったのね」

ぼんやりとチツチヨを撫でていたら下着姿で美里が現れた。城田は苦い顔をした。テレビは寝室にあるのだ。

「寒いだろ、服を着なよ」

我ながら無神経な言葉だと思いながら、他にどう言ったらよいか分からずに城田はそういった。

「寝室に行かなきゃないわ」

「いつてらっしゃい」

「一緒に来て」

美里が城田の首筋に抱き付き、そのセミロングの髪が頬に触れた。甘い香りがする。

「いいよ」

期待させるようなことはするべきではないかなと思いつつ、美里のいじらしさに苦笑して頷いた。城田はうとうととしているチツチヨを膝から降ろし美里について暗い寝室に入った。城田はクローゼットの戸を右手で示す。

「さあ服を着な、そしたら夕飯にしよう」

「酷い人」

美里が城田に抱き付いてベッドに倒れ込んだ。城田はどうして自分はこんなにも安定感がないのだろうと思って、不意に『進路指導室』でのことを思い出してしまい顔を顰めた。あの時もあの江口という少年の動きに任せて室内に連れ込まれ、机に押さえ付けられたのだ。

「淋しかったのよ、何日も会ってくれないから」

「ごめん」

城田は美里のその柔らかな胸に抱き込まれた。弾力のあるその感触と甘い香りに何か不思議な安心感を覚える。母性を感じると言ったら美里は怒るだろうか。頭を上げ美里の顔を見ると、どんな顔を

していいのかわからないというような微妙な表情をしていた。

「ねえ触って。私のこと愛してるって」

美里は言葉尻を濁した。城田が苦い顔をしたからかもしれない。かわいそうになって城田はその頬に口付け、もう一度柔らかな胸に顔を埋めた。それでもまだ性的な交わりは恐くて、ごめんと呟いてまた逃げた。

「どうしてもそんな気になれないんだ。君のせいではないよ。少し、気分が悪くて」

「いいの、そんな日もあるわよね。私だってそうだわ」

寛容にも美里は優しくそう言っつて、城田の頭を抱いた。柔らかい圧迫感が心地よくて、城田は自分の心が癒されていくのを感じた。城田も美里の腰を抱いた。

「もう一つ我が儘を言っつていいかな」

「なに」

「少しこのままで」

このままでいいかい、と聞き終わる前に美里の腕が城田の頭を抱く力が強くなり、頭上からくすりと笑う声が聞こえた。

「いいわ。私も、このままでいい」

その答えに安心して、心地よさに城田はまどろんだ。

夢を見た。江口もいる。しかしいつもとは違った。ただ目を合わせ、対峙している。詰め襟の学生服の江口は真面目な顔で、なぜか裸足の足が赤かった。近づくことはない。2メートルほどの距離を保って、触れることはない。何も恐い事などない。

その日から城田が江口の夢に苦しめられることはなくなった。

「あああ、もう元気になっちゃったね」

まだ腕の固定が取れない田上が不満げに呟いた。その顔はいつも以上にやつれている。隈はいつもの倍黒々と、肌はなんとも青暗い。城田が悩んでいると安心するというおかしな田上は、顔色よく何事もないように出勤してくる城田に喜びながら少し面白くなく思っているようだ。城田は田上の着替えを手伝いながら曖昧に笑った。

あれから一週間ちよつと、何事もなく前の生活に戻っていると聞いていいだろうが、生活が変わらないからといって全てが変わらないわけではない。ふとした瞬間に江口のことが頭を過ぎる。仕事と美里の事ばかりが占めていた頭の中に、あの危うい美貌が巣くっている。衝撃を薄れさせ、甘美な余韻ばかりが後を引く。記憶は少しずつ変容していた。そのために頭が忘れようとしなない。夢の苦しみが解消されなければそれはそれで忘れられはしなかつただろうが、それにしても厄介な残り方をしてしまった。城田は自分が新たな刺激を求めずにはいられない危険な人間にさせられてしまったように感じた。

「気に入らないなら田上さんも元気になればいい」

「気に入らないのはそういうことじゃないんだけどな」

田上の全てを整えて自分も着替えを済ます。ロッカーの整理をしていると、まだ作業時間になっていないのにどしどしと岸がよってきた。

「おいおい聞けよ、動物虐待事件がおきてる」

岸はばしばしと右手に持った新聞で城田の頭を叩いた。岸は城田が田上といるときでも必ず城田ばかりを叩く。絶対に田上のことは叩かない。入れ代わりの激しいこの職場では一年でも先輩になると待遇が変わるのかもしれない。それでなければ単に城田がからかいやすいだけか。

「ほらこれ、すぐ近くだろ」

城田は岸が差し出した新聞を受け取る。紙面の片隅にまだ小さく、この近くで相次いで動物の刺殺体が発見されていると記されていた。覗き見た田上が眉をよせた。

「ストレス発散か何かかな。利用されて殺された彼等がかわいそうだ」

「それも、見る、犯人は学生だとよ。この間も学生を処理したばかりだ、最近の若者ってやつは」

年寄りのように岸がお決まりの言葉を呟いた。記事を見直してみると、犯人はまだ捕まっていないが現場で何度も学生服姿の少年が目撃されているらしい。城田が処理した少年といい、江口といい、この犯人といい、この近辺の少年に何がおきているのだろうか。何か神経をおかしくする物質が充満でもしているのだろうか。

「きつとここにくるんだらうな」

ぼつりと田上が呟いた。もの憂げなその調子が何とも気にかかり、城田の頭の中に響き続けた。

何となくその日は美里の所に行きたくなかった。ドアを開けると美里は今日もにこにここと笑って出迎えてくれて、城田は少しほっとした気持ちになった。

「来るなんて思ってなかった。驚いたけど、嬉しいわ」

美里はダイニングの机に城田を促し、紅茶をいれる。食事は済んでいるの、と優しく問い掛けた。キッチンを伺うと美里はもう済ませた後のようだったので、本当はまだ食べていなかったが城田は嘘を吐いた。美里は笑顔のまま一言、そう、と言った。

ふと違和感を覚えた。城田は部屋を見回す。そして気付いた。チツチヨがいない。人懐こい彼女は城田が来るといつも足元に擦り寄ってくるというのに、今日は鳴き声の一つもしない。

「なあ、チツチヨは」

「いなくなったの」

「え」

「少し前から、いないの」

寝耳に水で城田は言葉が出ず、足元と美里を交互に見た。美里の張り付いたうす笑いに背筋が凍る。

「猫って寿命が来ると家を出て、人の見てない所で死ぬって言うじゃない。だから、探さないことにしたの」  
「言ってくればよかったのに」

美里は伏し目がちに紅茶のカップを見つめた。何度も右の親指でカップの縁を撫で、決まりのつかない顔をする。艶やかな髪が落ちかかって、薄紅の唇に触れた。

「落ち着いたら、言おうと思っていたのよ」  
「そう、か」

美里には親兄弟がない。だからチツチヨは言い方はおかしいがただ一匹の家族だった。そのチツチヨを失って平静を保てるわけもないのだと思い、城田にさえチツチヨの失踪を伝えられなかった美里を痛ましく感じた。

「淋しかったらろうね」

言つと美里が顔を上げ、城田を見つめた。きらきらと潤んだ寂しい目だった。城田は少し間の机を邪魔に感じた。

「ええ、そう。凄く、淋しかったのよ」

それは切実な哀訴だった。今にも涙が零れそうで、絶対に零れない。抱き締めてあげたくなくて、でもわざわざ立ち上がるのも滑稽な気がして、城田はティーカップにそえられた美里の手を包み込むように握った。その指は動揺を隠せないように冷えて硬かった。

「ねえ泊まって行って」

「いいよ」

無言で美里は城田を見つめた。すうつと何かが消えていったような不思議な色だった。あんまりにも瞬きをしないのでコンピュータがフリーズしたようだ。心配した城田が指を握る力を強めると、美里はふわりと淡く笑った。

「ありがとう、凄く嬉しい」

翌日は美里の部屋からそのまま出勤した。そして一日、失踪したチツチヨの事を考えた。チツチヨはいつも部屋の中で、そこ出ることもなどできなかつたはずだ。それがいなくなつた。美里の目をかい潜つて。あんなにも美里を愛した猫が、死に際だからといって美里の元を離れるのだろうか。愛したからこそ見せたくはなかつたのだろうか。

そう考えるとともに、城田の頭の中ではあの動物虐待事件のことが小さく主張していた。襲われたのは猫や犬、チツチヨだつて猫だ。無理に連れ出して殺したということではなくとも、偶然外に出てしまつたチツチヨをその犯人が殺したかもしれない。

そんなことを考えていたら、いつもは通らない住宅街を通り帰宅しようとしていた。暗く、人気のない細い道。事件のあつたのはこんな場所だつたかもしれない。犯人はもしや今日もこんな住宅街で犯行を行っているのではないか、という根拠のない疑いが襲い城田は辺りを見渡した。

そして城田は戦慄した。横に逸れた細い小路の先、暗闇に紛れて小さな人影があるのに気付いてしまったのだ。一人で突つ走るのはよくないと分かつているはずなのに、チツチヨの仇かもしれないという思いが衝動を呼び起こした。城田は気配を殺して人影に近づいていた。

「そこで何してる」

逃げられない距離まで間隔を詰めて、城田は低めた声で相手に凄んだ。やはり黒い詰め襟の学生服。犯行現場で目撃されていた学生ではないか。

「やっぱり会えましたね」

その声に耳を疑い、城田は飛び付くように相手の顔を引きよせた。暗闇でもこれだけ近ければ分かる。それにもう夜目がきくようになってきていた。黄味を帯びた遠い街灯を背に、くいと口角を上げ笑ったのが分かった。

「城田さん、この日がくるのを待ってた」

「名前」

「調べさせてもらいました」

教えたはずのない名を調べたの一言で軽く口にする少年に驚きを隠せなかった。江口はただ嬉しそうに笑い、城田は硬直する。

「君は一体何なんだ」

城田は絞り出すような声で言った。警戒心に満ちた声を浴びせられてなお笑顔のまま、江口は城田に抱き付き、城田は身を硬くした。その肩越しに赤黒い塊が見え、城田の頭の中で全てが繋がっ気がした。今までどんな人間にも抱いたことのない強く重い感情が沸き起こる。

「お前がやったのか」

「何を」

白々しくもおもしろがるような声音が返る。目の前が真っ赤になる心地がした。

教えてもない名を調べる江口なら、他のことまで調べが及んでいてもおかしくない。婚約者のこと、その家、そこで飼われていた小さな猫のこと。美里に対する当て付けか城田の関心を引きたかったか、何にせよ江口はチツチヨを殺し、それだけでは飽き足らず近

隣の犬猫を殺し続けたのだ。ただ城田に見つけてもらうため、気を引くため。ぞくりと城田は悪寒を覚えた。

「お前が殺したんだろっ」

本当にこいつは害性生物だった、と城田は息巻き声を荒げた。すると江口が少し身を離し、真面目な顔で城田を見つめた。

「そうかもしれないね」

「何だその人ごとみたいな返事は」

「犯人は淋しくてしょうがなかったんですよ」

またも江口は他人事のように言った。何が淋しかったただ一度会ったきりの相手に、と憤慨する。むきになる城田を嘲笑うかのように江口は笑い、そしておもむろに携帯電話を弄りだした。自分がいることを無視するようなその態度にさらに城田の怒りがます。それも何の偶然かその携帯電話は城田のものとそっくり同じで、城田は不愉快に感じた。

「わざわざ買い替えたわけじゃないだろうな」

「何をです」

画面から目を離さず江口が聞き返す。青白いライトで照らし出されたその顔は、その造りものめいた美貌とあいまって酷く不気味だ。

「その携帯電話」

言うやいなや夜の住宅街を叩き起こすような笑い声が響いた。江口が笑い転げている。造りものめいた顔も優等生然とした装いも全て吹き飛ばしてその時は本当に中学生だった。

「貴方のですよ」

「は」

「返します」

江口にその携帯電話を握らされ、ようやく城田は自身の携帯電話が掠め取られていたのだと気がきぶわりと赤面した。ふっふと息を乱したまま江口は潤んだ目で笑う。

「名残惜しいですがもう僕は帰ることにします」

「待て、俺と警察に付き合え」

「また今度にしましょう」

江口はそう笑うとまた城田の携帯電話を奪い取り、近くの民家の庭に投げ込む。

「また会う時は今度こそ名前を呼んでくれますよね」

それだけ言い残し強引に城田の唇を指で撫でて江口は逃げた。追おうかとも考えたが庭に捨てられた携帯電話がそうさせてくれなかった。こんなことで疑われたくない。

携帯電話を回収しようと庭に向き直った城田は血溜まりに横たわる犬の死骸をまじまじと見てしまい、胸の中に冷凍室のように冷たい風が過ぎた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8914d/>

---

蜘蛛の巣の蝶々

2010年10月26日13時56分発行